



“最期まで生きる”ことを共に学び、 より良いケアの実践につなげる

評者 | 田上恵太 やまと在宅診療所登米 / 東北大学院・緩和医療学



死亡直前と看取りの エビデンス 第2版

森田 達也, 白土 明美=著

定価: 3,740 円 (本体 3,400 円 + 税 10%)
B5・頁 312 / 医学書院 / 2023
[ISBN978-4-260-05217-7]

2023年8月より、仙台市から北に約100 km離れた地方都市にある、やまと在宅診療所登米で院長としての任務が始まりました。同僚の若手医師だけでなく、診療所の看護師や診療アシスタント、在宅訪問管理栄養士、そして同地域の緩和ケアや終末期ケアにかかわる医療・福祉従事者の仲間たちとともに、この土地で「最期までよく生きるを支える」ためにどのような学びが相互に必要なかを考えるようになりました。困難に感じることを聞いてみると、亡くなりゆく方々をどのように見ていけばよいか不安（時には怖いとの声も）との声が多く、まずは診療所内で『死亡直前と看取りのエビデンス 第2版』の共有を始めてみました。実臨床での肌実感をエビデンスで裏付けしている、まさにEBM（Evidence-Based Medicine）に沿った内容でもあり、医師や看護師など医療者たちにも強くお勧めできる内容であると感じています。

病院看取りが主流になっていた昨今の社会情勢の影響か、これまでに死亡前の兆候を目にしたご家族やスタッフは少なく、不安や恐怖を感じる人が多いです。しかし、本書でまず初めに述べられているように、多くの兆候はあらかじめ想定することが可能で、ご家族やスタッフとも事前に共有することができます。そして本書には、このような兆候がなぜ生じるのかEBMに沿って解説されているだけでなく、緊張が高まる臨死期のコミュニケーションの工夫まで触れられており、医療者だけでなく、その他の関係者にとっても心強いリソースとなります。

本書は臨死期の情報だけでなく、予後予測や輸液の妥当性、鎮静の考察、意思決定支援に関するコミュニケーション、終末期のWell-Beingや生活の質の保障の考え方、呼吸困難や昏迷、死前喘鳴の症状緩和に向けたアセスメントと病態の考察、死亡直後のグリーフケアからエンゼルケアまでを網羅しています。患者さんやご家族との終末期の療養や医療に関するアドバンス・ケア・プランニングに必要な要素が豊富に取り扱われており、この一冊を通じて新しい視点や考え方を共有し、お互いに高め合うことができます。

著者のお2人は僕の大切なメンターです。森田達也先生から研究会議やお酒の席でいただくフランクなアドバイスの数々は、まさに僕の羅針盤です。「物事によって検証と実装の順番を考えるべき」など目を覚ますようなアドバイスを常にいただき、自身のキャリアパスにも落とし込んでいます。白土明美先生には年に1回「詣で」ており、焼酎や鶏刺しを片手にお互いの“緩和ケア感”の変化や地域に持つビジョンなど、心の中を共有する時間を共にさせていただいています。このように、客観的な視点に富み、テイラーメイドなケアやマネジメントができるお2人がまとめられた本書は、EBMに沿いながら、個々の葛藤や困難を解決できる手引きとして、多くの方々にとって日々の実践の中での支えや示唆を提供する福音のような存在となるのではないかと感じています。そして本書を中心に、“最期まで生きる”ことを共に学び、そしてより良いケアの実践につなげていただければと願っています。

